

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00008

研究課題名(和文) 因果概念の分析に基づく責任帰属の哲学的研究 - 不在因果の問題を中心に -

研究課題名(英文) A Philosophical investigation concerning the attribution of responsibility on the basis of the analysis of the concept of causation: In the light of problems on causation by absence

研究代表者

一ノ瀬 正樹 (ICHINOSE, Masaki)

武蔵野大学・人間科学部・教授

研究者番号：20232407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、責任帰属をめぐる理論的問題に対して、哲学の因果論を適用することで一定の明晰化を果たそうとするものである。その根底には、災害や感染症の際に、根拠の不明な主張が飛び交い、そうした主張のゆえに、災害本体とは別の二次被害が多々発生してしまうという悲劇に対して、その因果的構造を明らかにして、事態を解明したいという狙いがあった。そして、その狙いを果たすべく、認識や信念形成の際に証拠や根拠の確認を怠るといふ、認識的「過失」という不在を原因として害がもたらされる、という不在因果として問題を整理して、英国の哲学者クリフォードの「信念の倫理」に即しながら、責任帰属と因果性の問題について議論を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

加害と被害の構図は、現代社会においては、刑法や民法によって判定される。けれども、SNSが普及し、一人の人の発言が瞬時に多くの人々に伝わる時代には、これまで想定されていなかったような加害と被害の様態が現出してきた。とりわけ、SNSやネットを通じた誹謗中傷や風評による加害と被害については、現代社会の中での早急な対応策が求められている喫緊の課題である。当研究課題は、こうした問題に対して、哲学での因果論、とりわけ「不在因果」をめぐる議論を適用することで、一定の理論的筋道を与えようとした。道半ばではあるが、議論の方向性を示すことはできたと思われる。

研究成果の概要(英文)：This project aims to clarify the problem of attribution of responsibility by applying philosophical theories of causation. This is motivated by our academic intention to focus on such a tragedy that some ungrounded and unclear claims tend to be spread in the time of disasters and pandemics to result in secondary harms, and investigate the tragic issues by elucidating causal structures of such secondary harms. Following the academic intention, we understood the issues as being caused by a kind of negligence to confirm evidence or ground, that is to say, a kind of "causation by absence". In particular, we developed our arguments on the tragic issues in terms of referring to "the ethics of belief" that was originally discussed by a British philosopher, W.K. Clifford in the 19th century.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：責任帰属 不在因果 過失 信念の倫理 W.K. クリフォード 風評

因果概念の分析に基づく責任帰属の哲学的研究 - 不在因果の問題を中心に -

一ノ瀬正樹

1. 研究開始当初の背景

研究課題の背景には、2011年の大震災と原発事故をめぐって、事実と規範の混じり合った多様な言説が流通し、混乱の極みに達していたことを受け、どういう害が発生したのか、害発生責任はどこにあるかについて、理論的に解明したいという研究者としての思いがあった。それを果たすため、まずは、私たちの行為や人格に対する責任帰属の意義と、妥当な方法について、責任概念と因果概念の同根性に沿いながら、因果関係に関する哲学的分析を通じて、理論的探究、および実践的適用の両面を視野に入れて解明していく。理論的探究という側面からは、ヒューム以来の因果の規則性説、確率的因果、などの「因果関係とは何か」という問いに答える議論や、反事実的条件分析、文脈感受性による理解、などの「私たちの因果関係理解の構造はどのようなものであるか」という問いに面する議論を検討する。そして実践的適用に関しては、「近因」と責任帰属との関連、故意と過失の境界、「原因において自由な行為」をめぐる問題、などの刑法的課題についての哲学的解明を目指す。いずれの場合も、「不在」(absence)や「不作為」(omission)が原因として指定されうるという事態を問題の発端に据えて考えてゆく。それが当初の問題設定であった。

2. 研究の目的

加害と被害の構図は、現代社会においては、刑法や民法によって判定される。けれども、SNSが普及し、一人の人の発言が瞬時に多くの人々に伝わる時代には、これまで想定されていなかったような加害と被害の様態が現出してきた。とりわけ、SNSやネットを通じた誹謗中傷や風評による加害と被害については、現代社会の中での早急な対応策が求められている喫緊の課題である。当研究課題は、当初の、コロナ問題発生以前の段階では、こうした加害と被害の新しい様態について明確に主題化されていなかったが、コロナ問題が発生し、ワクチン接種などに絡んで流言や風評が広まったことなどもあり、そのように加害・被害の構図に焦点が収斂してきた。そして、当研究は、そうした加害・被害の構図を哲学の因果論を適用して解明していくことを目的として展開されてきたのである。しかし、全体としては、もともとの趣旨通り、こうした問題に対して、哲学での因果論、とりわけ「不在因果」をめぐる議論を適用するという点では一貫しており、そうした視点から加害・被害の新しい様態について一定の理論的筋道を与えようとした。道半ばではあるが、議論の方向性を示すことはできたと思われる。

3. 研究の方法

最大の手がかりは、「予防」と「不在」である。責任概念は主として過去事象に当てはまるので、「予防」といっても遡及的な後知恵の意味での「予防」である。さらに、なぜ「不在」が問題になるかということ、「育児放棄が子どもの死亡の原因となった」といった例のように、「何もしなかった」「何も起こらなかった」ことが原因として指定されることはごく普通だからである。法的な文脈での「不作為」である。こうした枠組みのもと、本研究では、何か原因を解明すべき事象が起こったとき、それを「予防」する手立てが「不在」だったことが原因だ、という理解を因果関係理解の一般形として提起したい。これは「もしこれこれの予防手段を講じていれば（つまり予防手段不履行がなかったならば）、しかしかの結果は生じなかっただろう」という反事実的条件分析を「不在因果」という形式で採用して、因果関係一般を分析するということである。そうして出てくる場面を、二つに分けたい。一つは、予防しようにもそもそも予防しようがなかったと解される場面である。地震で死者が出た場合のように、いわば決定論的に因果関係が帰せられる場面で、ここでは責任概念は機能せず、むしろ究極的には「宿命」とか「神意」といった概念によって理解さえされるような状況である。もう一つは、予防手段が実行可能であったと遡及的に解される場面である。津波から避難する場面で死者が出た場合など、避難経路に複数の選択肢があった状況のことである。こうしたときに責任概念が浮上する。本研究では、こうした予防手段について、そうした予防手段実行にかかるコスト、実行のための所要時間、現在時点からの時間的距離（「近因」の概念の応用）、という三つの基準からいけば計量化して、原因としての適切性のランクづけをして（三つの基準の値が大きいほど適切性は低い）責任帰属の適切度を明確化したい。それを、故意と過失、「原因におい

て自由な行為』のような刑法的問題に応用していく。

4. 研究成果

単著として、

- ・『英米哲学入門 - 「である」と「べき」の交差する世界』、ちくま新書、2018年4月、362頁
- ・『いのちとリスクの哲学 - 病災害の世界をしなやかに生き抜くために』、株式会社ムー、2021年3月11日、372頁

編著として、

- ・『病災害の中のしあわせ - 自然災害とコロナ問題を踏み分けて - 』、西本照真との共編著、武蔵野大学出版会、2021年12月、270頁（担当部分・序章「しあわせ」の二極性から「個人」概念の深みへ - 」pp.5-21、第5章「自然災害と感染症に立ち向かう倫理 - 大震災とコロナ感染症の中で「しあわせ」は成り立つか - 」pp.97-140.）

共著の分担執筆論文として、

- ・『科学リテラシーを磨くための7つの話』、共著、児玉一八・小波秀雄・高野徹・高橋久仁子・ナカイサヤカ・名取宏との共著、あけび書房、2022年3月、181頁（担当部分・第5章「倫理とリスクと予防と前進と」、pp.104-128.）
- ・『人のゲノム編集をめぐる倫理規範の構築を目指して』、田坂さつき・香川知晶編、知泉書館、2022年3月、277頁（担当部分・第6章「ゲノム編集問題をめぐる害と非同一性 - ウィルキンソンの議論に寄せて - 」、pp.125-138.）

論文として、

- ・「震災関連死の原因について」（『<ポスト3.11>メディア言説再考』第4章、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編著、法政大学出版局、2019年3月、pp.81-112.）
- ・「高校新科目「公共」についての哲学的覚え書き」（『思想』第1139号、岩波書店、2019年3月、pp.139-164.）
- ・「死の害についての「対称性議論」をめぐって - 因果概念に照らしつつ - 」（『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第9号、武蔵野大学教養教育リサーチセンター、2019年3月、pp.105-125.）
- ・「リズムの時間遡及的本性についての哲学ノート - 「音楽化された認識論」への小さなインターロード - 」（『フィルカル』Vol.4, No.1、株式会社ムー、2019年3月、pp.6-15.）
- ・「確率のリアリティ」（『現代哲学のキーコンセプト 確率』（佐竹佑介訳）解説として所収、岩波書店、2019年6月、pp.193-204.）
- ・「非合理性と合理性の伸縮」（『現代哲学のキーコンセプト 非合理性』（鴻浩介訳）解説として所収、岩波書店、2019年7月、pp.189-198.）
- ・「「自由意志」を論じるとはどういうことか」（『現代哲学のキーコンセプト 自由意志』（高崎将平訳）解説として所収、岩波書店、2019年9月、pp.141-160.）
- ・「「真理である」ことの真理」（『現代哲学のキーコンセプト 真理』（野上志学訳）解説として所収、岩波書店、2019年11月、pp.217-228.）
- ・「イノベーションは何のために - SDGsを見据えた哲学的考察」（『人間会議』2019年冬号、事業構想大学院大学出版部、2019年12月、pp.186-191.）
- ・「因果関係は存在するのか」（『現代哲学のキーコンセプト 因果性』（相松慎也訳）解説

として所収、岩波書店、2019年12月、pp.199-214.)

- ・「ためらい、浮動しゆく思考 - 自分が自分でなくなるような瞬間の響き」(『因果・動物・所有 - ノ瀬哲学をめぐる対話』宮園健吾・大谷弘・乗立雄輝編、武蔵野大学出版会、2020年1月、pp.357-388.)
- ・「ロック言語論と「プライベート性」の問題」(『龍谷哲学論集』第34号、龍谷哲学会、2020年1月、pp.3-35.)
- ・「パークリの数学論 - 幾何と算術のゆらぎをめぐる - 」(『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第10号、武蔵野大学教養教育リサーチセンター、2020年3月、pp.79-94.)
- ・「「思考実験」から「知識の新因果説」へ - ウィリアムソンの議論に即して - 」(『イギリス哲学研究』第43号「会長講演」、日本イギリス哲学会、2020年3月、p.5-21.)
- ・「原子力災害と「いのちの保全」 - 哲学の視点から」(『ATOMOS』日本原子力学会誌、vol.62,2020年3月、pp.114-115.)
- ・「死者のかすかな存在性」(『añjali』第39号、親鸞仏教センター、2020年6月、pp.10-14.)
- ・「放射線被ばく問題から新型コロナウイルス問題へ - 合理的に認識する責任 - 」(『エネルギーレビュー』vol.474、2020年7月号、pp.38-42.)
- ・「分析哲学の興亡」(『世界哲学史8 - 現代グローバル時代の知』、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、ちくま新書、2020年8月、pp.17-50.)
- ・「放射線被ばく問題と「信念の倫理」」(『ATOMOS』日本原子力学会誌、vol.63,2021年2月、pp.4-5.)
- ・「「信念の倫理」研究序説」(『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』第11号、武蔵野大学教養教育リサーチセンター、2021年3月、pp.29-46.)
- ・「因果と応報 - 哲学の視点から - 」(『心』日曜講演会講演集、第39集、武蔵野大学、2021年4月、pp.29-47.)
- ・「コロナ時代の無常観 - 「予防文脈」と「危機文脈」のずれ違いを考える - 」(『朝日新聞』digital「論座」、2021年6月13日)
- ・「「見ること」と「見ないこと」の同時性 - 新型コロナ感染症問題についての哲学的覚え書き - 」(「「コロナ前」の暮らしを取り戻そう！市民の会」、<https://info423665.wixsite.com/koewoageyo2021/blog>、2021年8月19日)
- ・"The death penalty and a Lockean impossibilism". (In *Locke on Knowledge, Politics and Religion*, eds. K. Shimokawa and P. Anstey, Bloomsbury, October 2021, pp.145-166.)
- ・「「鳥獣害」を被る人々に動物倫理は何を語るか」(『法の理論 40』長谷川晃・酒匂一郎・河見誠・中山竜一編に所収、成文堂、2021年12月、pp.145-169.)
- ・「原発問題、信念の倫理、そして幸福」(『エネルギーレビュー』vol.492、2021年12月号、pp.38-41.)
- ・「「信念の倫理」と非難相当性の問題 - 「信念の倫理」研究序説(2)」(『武蔵野大学人間科学研究年報』第11号、武蔵野大学人間科学研究所、2022年3月、pp.21-38.)

最終年度の研究成果について少し敷衍すれば、事実の認識に際して、証拠や根拠を注意深く確認することを怠るという意味での「過失」や「不作為」を原因として、有害な結果が帰結してしまうという「不在因果」が問題となる事態に再度焦点を当てて、そうした事態に関する倫理的評価の

問題をさらに検討した。具体的には、W.K.クリフォードの「信念の倫理」の検討・検証を通じて、自然災害や感染症などにおいて発生しがちな「風評」に関する倫理的評価の問題を論じた。その成果として、「原発問題、信念の倫理、そして幸福」(『エネルギーレビュー』vol.492、2021年12月号、pp.38-41)、「信念の倫理」と非難相当性の問題 - 「信念の倫理」研究序説(2)」(『武蔵野大学人間科学研究所年報』第11号、武蔵野大学人間科学研究所、2022年3月、pp.21-38)の2論文を発表した。これはまさしく、「不在因果」と「責任帰属」の問題の研究である。さらに、そうした研究文脈の延長線上で、Covid-19の問題にも視線を広げ、次の共編著を研究成果として発表した。『病災害の中のしあわせ - 自然災害とコロナ問題を踏み分けて - 』(西本照真との共編著、武蔵野大学出版会、2021年12月、270頁(担当部分・序章「しあわせ」の二極性から「個人」概念の深みへ - 」 pp.5-21、第5章「自然災害と感染症に立ち向かう倫理 - 大震災とコロナ感染症の中で「しあわせ」は成り立つか - 」 pp.97-140)。ここでも、まずは事実確認における検証の不在が重大な害を因果的に惹起する可能性について論じた。それ以外に、動物倫理についても、人間と動物の関係性について、その固有の複雑性を見逃すこと、そういう意味での「不在」が、大きな問題をもたらす可能性について論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 第39号
2. 論文標題 死者のかすかな存在性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『anjali』	6. 最初と最後の頁 pp.10-14.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 vol.474
2. 論文標題 放射線被ばく問題から新型コロナウイルス問題へ - 合理的に認識する責任 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『エネルギーレビュー』	6. 最初と最後の頁 pp.38-42.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 vol.8
2. 論文標題 分析哲学の興亡	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『世界哲学史8 - 現代グローバル時代の知』	6. 最初と最後の頁 pp.17-50.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 vol.63.
2. 論文標題 放射線被ばく問題と「信念の倫理」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『ATOMO 』日本原子力学会誌	6. 最初と最後の頁 pp.4-5.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 第11号
2. 論文標題 「信念の倫理」研究序説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』	6. 最初と最後の頁 pp.29-46.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 2019年冬号
2. 論文標題 イノベーションは何のために - SDGsを見据えた哲学的一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『人間会議』	6. 最初と最後の頁 186-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 第34号
2. 論文標題 ロック言語論と「プライベート性」の問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『龍谷哲学論集』	6. 最初と最後の頁 3-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 第10号
2. 論文標題 パークリの数学論 - 幾何と算術のゆらぎをめぐって -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要	6. 最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 第43号
2. 論文標題 「思考実験」から「知識の新因果説」へ - ウィリアムソンの議論に即して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 5-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 1
2. 論文標題 震災関連死の原因について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『<ポスト3.11>メディア言説再考』第4章、法政大学出版社	6. 最初と最後の頁 81-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 1139
2. 論文標題 高校新科目「公共」についての哲学的覚え書き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岩波書店『思想』、2019年3月号	6. 最初と最後の頁 139-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 第9号
2. 論文標題 死の害についての「対称性議論」をめぐって - 因果概念に照らしつつ -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』	6. 最初と最後の頁 105-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 Vol.4, No.1
2. 論文標題 リズムの時間遡及的本性についての哲学ノート - 「音楽化された認識論」への小さなインターラード -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『フィルカル』、株式会社ミュー	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 13件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 エシカル・エンジニアの時代に向けて：これからの自動車技術が求めるエンジニア像・その展望
3. 学会等名 『自動車技術会オンラインフォーラム』（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 新型コロナウイルス問題における倫理
3. 学会等名 武蔵野大学しあわせ研究所シンポジウム「「不可避的な病災害のなかでのしあわせ学」序説」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 新型コロナウイルス問題と感染症倫理
3. 学会等名 日本学術会議「いのちと心を考える」分科会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 震災10年を機にコロナウイルス問題を考える
3. 学会等名 哲学熟議（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 高校新科目「公共」について - 哲学の視点から -
3. 学会等名 令和元年度 都倫研第一回研究例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 因果と応報 - 哲学の視点から -
3. 学会等名 第611回「武蔵野大学日曜講演会」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaki Ichinose
2. 発表標題 Thought Experiments, Counterfactuals, and Knowledge: From Williamson Onwards
3. 学会等名 Tokyo Forum for Analytic Philosophy（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaki Ichinose
2. 発表標題 Locke on language and its privateness
3. 学会等名 UK-Japan Special Conference: Aspects of Early Modern British Philosophy, The 1st Overseas Session of Japanese Society for British Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaki Ichinose
2. 発表標題 On Infinite Regress in Hume's Theory of Causation
3. 学会等名 Various Shapes of British Thought and Philosophy---Centering on Enlightenment and Common Sense Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 人と動物のつながり? - ハチ公、けれど鳥獣害
3. 学会等名 東京大学朝日講座『つながりから読み解く人と社会』(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 原子力災害におけるリスクと予防 - 哲学的因果論の観点から -
3. 学会等名 第51回原子力安全に関する特別セミナー(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masaki Ichinose
2. 発表標題 Late birth and early death: A consideration about the symmetry argument on death
3. 学会等名 The 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaki Ichinose
2. 発表標題 On Human Rights of Dead People
3. 学会等名 International Conference: Human Rights and Human Security. Achievements and Challenges. The 70th Anniversary of the Universal Declaration of Human Rights (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 ロック言語論と「プライベート性」の問題
3. 学会等名 龍谷哲学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 福島における震災関連死とその周辺の問題をめぐって - 哲学の視点から -
3. 学会等名 「第50回 原子力安全に関する特別セミナー」 原子力安全研究協会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 Williamson on Thought Experiments
3. 学会等名 Japanese Society for British Philosophy, the 43rd Annual Conference (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミュー	5. 総ページ数 398
3. 書名 いのちとリスクの哲学 病災害の世界をしなやかに生き抜くために	

1. 著者名 ダレル・P・ロウボトム、佐竹 佑介、一ノ瀬正樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 222
3. 書名 現代哲学のキーコンセプト 確率	

1. 著者名 リサ・ボルトロッティ、鴻 浩介、一ノ瀬正樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 214
3. 書名 現代哲学のキーコンセプト 非合理性	

1. 著者名 ジョセフ・K・キャンベル、高崎 将平、一ノ瀬 正樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 182
3. 書名 現代哲学のキーコンセプト 自由意志	

1. 著者名 チェイス レン、野上 志学、一ノ瀬 正樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 246
3. 書名 現代哲学のキーコンセプト 真理	

1. 著者名 ダグラス・クタッチ、相松 慎也、一ノ瀬 正樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 230
3. 書名 現代哲学のキーコンセプト 因果性	

1. 著者名 宮園 健吾、大谷 弘、乗立 雄輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 武蔵野大学出版会	5. 総ページ数 396
3. 書名 因果・動物・所有 一ノ瀬哲学をめぐる対話	

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 362
3. 書名 英米哲学入門 -「である」と「べき」の交差する世界-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>第5回 武蔵野大学しあわせ研究所シンポジウム「不可避な病災害のなかでのしあわせ学」序説 https://www.musashino-u.ac.jp/event/20210111-00000562.html Masaki Ichinose's Philosophy Voice https://www.musashino-u.ac.jp/m_ichinose/</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------